

論文要旨

題目 女性における実利主義的恋愛観に関する研究：“ロマンティック幻想”概念に基づく検討

氏名 麻生 奈央子

本研究は、女性の実利志向的な恋愛観として、ロマンティック幻想（Romantic Fantasy, 以下 RF という）を検討するものである。RF とは、ファンタジー物語の王子様のように自分を庇護してくれる援助者の役割を、パートナーに求める幻想であり恋愛観である。

日本の青年期の恋愛観として、男性が利他的で適応的な恋愛観を抱く傾向であるのに対し、女性は実利志向的で利己的な恋愛観が特徴であると指摘されている（e.g., Kanemasa, Taniguchi, Daibo, & Ishimori, 2004）。そこで本研究において、日本における現代女性の利己的な恋愛観として RF を測定し検討することとした。RF は、Rudman & Heppen（2003）によって最初に提唱された恋愛観であるが、その理論、機能、規定因において、十分に検討されていなかった。そこで本研究で RF を測定し、理論と機能、規定因について検討することとした。

本研究は、はじめに RF の測定について 3 つの研究で検討した。

過去の先行研究では、自動的な態度や潜在的な態度、または社会的に望ましくない態度においては、質問紙（顕在測度）では測定に限界があると指摘された。Rudman & Heppen（2003）は、RF とは回答者が必ずしも意識しない潜在的態度であり、したがって、回答者が回答を意識的に統制しない潜在測度が妥当であると指摘した。

本研究では、Rudman & Heppen（2003）に倣って RF を回答者の現実の恋人に対する知覚（現実 RF）を質問紙で測定し、潜在連合テスト（IAT）を使用して、潜在 RF を測定した。そして本研究で新たに 3 つ目の RF として、質問紙で回答者の理想の恋人に対する願望（理想 RF）を測定した。

IAT は、回答者本人が必ずしも意識しない潜在的態度や自動的な態度を測定するといわれている。従来、IAT では回答者が対象（例えば、自己）を 1 つの属性（例えば、快）と知覚することで、その対象と属性の概念間連合がなされると考えられている。しかし、潜在測度の命題モデル理論（De Houwer, 2014）に基づき、本研究において願望による IAT 概念間連合仮説を検討したところ、IAT で測定した潜在 RF は、回答者の欠乏感の有無によって測定概念が変化することが示された。回答者が欠乏感を感じている時、IAT は回答者の知覚（現実 RF）ではなく、願望（理想 RF）を測定している可能性が示唆された。そして、実利志向的な恋愛観の測度として、RF の 3 測度のうち、質問紙で測定した理想 RF が RF の測度として妥当であると示された。

Rudman & Heppen（2003）によれば、RF とは、実利志向的な恋愛観であり、また女性の社会経済的地位の向上に足かせになる恋愛観であると主張した。しかし、Rudman & Heppen（2003）はそのことについて十分実証していたとはいえない。

そこで本研究では、RFの理論を2つの観点から検討した。1つ目は、実利志向との関係である。研究2-1の結果、青年期女子の理想RFは、結婚相手に望む条件として愛情や性格などの内面性を有意に予測せず、年収や学歴などの実利を重視する傾向を有意に予測した。

2点目は、性差別との関係である。研究2-1の結果、理想RFは、現代の新しい性差別を正の方向で有意に予測した。理想RFが高いほど、両価値的性差別（Glick & Fiske, 1996）が高いと示された。

次にRFの機能について、満足感との関係を検討した。研究2-2の結果、未婚の青年期女子において、また研究1-3では既婚の成人期女性においても、理想RFが高いほど、パートナーとの関係満足感が低いことが示された。

最後にRFの規定因を検討した。研究3-1の結果、シンデレラ物語との接触は、ヘレン・ケラー物語との接触に比べ、3つのRFのうち、理想RFに正の影響を示した。さらに研究3-2の結果、シンデレラ物語との接触は、実利志向の指標にも理想RFと同様に正の影響を示した。また研究3-3の結果、育児中の母親の理想RFの高さは、母親が女兒の育児に使用するシンデレラ物語を選好する傾向に有意な予測効果を示し、その母親の選好傾向を媒介して、女兒の同物語との接触頻度に有意な予測効果を示すことが示された。また研究3-4の結果、子どもに同物語と接触した頻度は、青年期女子の理想RFの高さを有意に正の方向で予測効果を示した。

以上、9つの研究の結果を以下にまとめる。ロマンティック幻想とは、パートナーにファンタジー物語の王子様のような庇護者の役割を求める極端な幻想であり、実利志向的な恋愛観である。RFの測度として理想RFが妥当である。理想RFが高いほど、パートナーに高い社会経済的地位を望み、その地位を通じて自己の価値を高めたいと考える信念が高い。そして女性は男性に比べて生得的に有能さで劣るため、現代の社会経済的地位のジェンダー間格差は容認すべきだと考える傾向が高い。そして、現在のパートナーとの関係に満足感が低く、二者関係において適応的ではない可能性が示唆された。

RFは社会環境の中で活性化し培養される。たとえば、メディアとの接触はその一つである。RFはメディアとの接触や親の養育態度などによって影響を受けうる恋愛観である。したがって、RFは女性に生得的なものではなく、今後、ジェンダー間格差が解消され、メディアを含む社会環境が変化する中で、将来可変する可能性は考えうる。